

環 (あい)

光耀抄	2
琥珀集	6
瑠璃集	15
瑪瑙集	27
紅玉集	30
俳誌交歓	31
7月号月評	32
惠贈句集拝見 (61)	34
惠贈俳誌拝見 (30)	36
特別作品「沿岸急行船の旅Ⅰ」	38
「極光」	40
琥珀集作品鑑賞	42
瑠璃集作品鑑賞Ⅰ	43
瑠璃集作品鑑賞Ⅱ	44
瑪瑙集紅玉集作品鑑賞	45
ひこばえ会通信 (22)	47
他誌転載	48
妣の国父の蒼天 (52)	50
和歌山一泊吟行記 (Ⅱ)	52

今月の一句

いく坪の静生地を蟹歩む

桂樟蹊子

(平成二年作)

丹後の網野町から西へ二キロばかり行ったところに磯と言
う漁港がある。その傾斜した磯の集落の中ほどに、港を見下
ろす五十平米ほどの空地があるが、そこが静御前の生家跡で
ある。義経との別れを惜しんだ悲しみの岩もいまは波うつば
かり、蟹が這っていたと言う。

隆子

藤を見る

塩路隆子

先づ猫が顔出す寺の春障子
潮の香を一気に啜りあおさ汁
土器片を後生大事に進級児
藤を見る髪美しき人とゐて
朴の花咲きて故山の神々し
人よりも馬の血統臯月賞
昼寝するつもりなけれど寝てしまふ

七月号光耀抄

塩路 隆子選

婚礼やマーガレットの花冠
ボサノバが部屋に澱んで暮の春
気兼ねなき土間の一角燕の巢
二歳児も汗かき走るドッグラ
仔猫眠る茅葺駅の小座布団
次男には次男の役目柏餅
若葉風倅せといふ届けもの
竹林に雨音幽か利休の忌
きれぎれの主婦の時間や木の芽摘み
石像のガラシャの気概紅躑躅
野趣に富む窯変の壺新樹光
先導の蹄軽やか賀茂祭
里坊の庭は千坪昼蛙
産土に妣のぬくもり葱坊主
夏立つやリネンのシャツに袖通し
邪気払ふいくさ無き世の武者人形
長閑さや間延びのしたるちんどん屋

常田 創
西郷 慶子
藤本 秀機
土井久美子
粟倉 昌子
森下 康子
宮崎左智子
田中 浅子
伊東 和子
和田 郁子
井口 淳子
石川かおり
伊藤 純子
大松 一枝
笠井 清佑
川崎 利子
北尾 章郎

断層を今も頭はに青葉峪
 流鏑馬の音響く若葉杜
 忽然とぐらつく奥歯三鬼の忌
 にはとりの水噛む仕種夏兆す
 氷見番屋大漁汁のあたたかき
 おぼる月産科に突如嬰の声
 生き生きと氷室の神の花氷
 綻びの始まる齡春の風邪
 手秤りの砂糖販げり昭和の日
 廃校と決まる分校鯉のぼり
 夏に入る水の都の新駅舎
 金箔を紙くづとせる薄暑かな
 棟梁のゐるらし蟻の穴普請
 あるじ待つ愛車の赤や春陽映え
 麦の秋きらきら星のリコーダー
 風いっばい幸せ運ぶ緋鯉かな
 雅楽の音響く御影堂木の芽風
 春日差に猫寝そべりぬ寺の庵
 背に眠る児に囀りの自在なり
 自慢気にさし出す大将初鯉

坂上 香菜
 坂根 宏子
 阪本 哲弘
 塩路 五郎
 鈴木 照子
 竹内 悦子
 田下 宮子
 辻 知代子
 中本 吉信
 西田 史郎
 橋本 靖子
 福本 すみ子
 松岡 和子
 松田 和子
 宮田 香
 森田 利和
 山口 キミコ
 山崎 里美
 大越 義雄
 大堀 賢二

置葉のふうせん四角昭和の日
 菖蒲の湯ずしりと重き嬰を抱き
 自在なるトランペットや風薫り
 藤の花風に揺れゐる静けさに
 草青み鍬一丁に楔打つ
 新緑やいっぷく亭の昼御膳
 極彩の鳥黙らせよ大驟雨
 浮くごとく飛ぶが如くに花水木
 咲き満ちる花はまぶしき点描画
 苺つぶすひと日の不満口にせず
 春まつり子供歌舞伎の見得みごと
 緑さし白衣まぶしや理系女子
 新緑のフイトンチッドを深く吸ふ
 熟れごろのメロンのさまに春の月
 大本命外れ響動めく春競馬
 おしゃべりに佳境の姉妹古茶好み
 鐘楼を囲む牡丹の二千株
 パスカルのまだ見ぬ世なり蘆の角
 大空を翔けよこの子の鯉のぼり
 保育児の声のぼりゆく木の芽坂

中村ふく子
 谷口俊郎
 渡部法子
 大島みよし
 能勢栄子
 高谷栄一
 吉田希望
 吉田宏之
 中井弘一
 藤見佳楠子
 伊藤和子
 辻香秀
 三川美代子
 杉本綾
 山本孝夫
 和田森早苗
 飯田美千子
 坂倉安正
 稻田和子
 落合晃

風光るむかし漁場の力石
 蒲公英の絮の旅立ち風まかせ
 四つ目紋受け継がれたる夏羽織
 休日の県庁の庭藤揺るる
 筍といふ札幌に散居邑
 筍が届く在所の土を付け
 王朝の所作見るさまや藤ゆるる
 春時雨楓の青さ磨きけり
 鴨帰り後は淋しき波の影
 風薫る比叡の山を真正面
 朝掘りの筍の味さすが旬
 舞妓麗し都をどりのよいやさあ
 積尊を濡らす柄杓や灌仏会
 ゴッホ展出づればさくら印象派
 桜咲く古城の前のウエディング
 塔を背に沸き立つ如く室桜
 新緑の匂ふ庭園普茶料理
 豪快な炮烙割りや壬生狂言
 熱演のこども歌舞伎へ花吹雪く
 若妻の越後土産や笹粽
 春惜しむ加賀友禅の華のれん

片岡久美子
 桂 敦子
 河田 孝子
 木戸 宏子
 国包 澄子
 小西 和子
 小林 久子
 笹井 康夫
 佐用 圭子
 鷺見たえ子
 高屋喜美子
 田中 久子
 津田 富司
 中井登喜子
 中川すみ子
 西垣 順子
 難波 篤直
 秦 和子
 増田 一代
 山田 愛子
 横田 矩子

琥珀集

暮の春

西郷 慶子

列離れよそ見の蟻の好奇心
卵の花のしろがこぼれて咲きぬたり
若葉して巨楠猛き獣めく
手の触れて崩るる薔薇を惜しみけり
ボサノバが部屋に澱んで暮の春
畦道を行くランドセルねぎぼうず
母の日やエプロンの下子が隠れ

花冠

常田

創

リラの花

藤本 秀機

春雨の朝をベールに守られぬ
婚礼やマーガレットの花冠
夏燕や旅券に我の如き顔
火山島には虹の空広がりぬ
鉦持てば無敵パイナップルに棘
砂日傘夜の温度を保ちけり
食べらるるものみな食べてここ避暑地

区画田に代掻続く近江かな
春祭赤き鼻緒の藁ぞうり
かざ車回る下町乳母車
人の世の歳月を生き藤の花
気兼ねなき土間の一角燕の巢
昔日の八十八夜農繁期
思ひ出のひと齣止めてリラの花

大型連休

土井久美子

磯の香の部屋に広がる若布茹で
朝仕事そそくさと終へ新茶汲む
二歳児も汗かき走るドッグラン
犬連れも子連れも多し黄金週間
オーシャンビュウの足湯極楽黄金週（伊東）
お鉢めぐり青野広がるコリア山（大室山）
相模湾眺めつ鯨の活料理

陸奥の春

栗倉 昌子

陸奥の桜桃木瓜揃ひ咲き
春川に晒す椽の実布袋
幼小中並ぶ校舎や土筆原
仔猫眠る茅葺駅の小座布団
花冷えや列車待つ間の長足湯
青空よりなだれ打つかに滝桜
千年の精霊棲まふ滝桜

初節句

森下 康子

へそくりの隠し場忘れ亀の鳴く
次男には次男の役目柏餅
口紅の食み出してをり夏立つ日
飛び出せる絵本も飾り初節句
必要とさるるが華よカーネーション
ファッションの街夏シャツの襟立てて
気遣ひが出来て成長子供の日

桜餅

宮崎左智子

佐保姫の去りし山里水まつり
大空を映す棚田や五月晴
夜目に浮かぶ花の白さよ水芭蕉
若葉風倅せといふ届けもの
木洩日のスポット浴ぶる著莪の花
早咲きのあやめ色増す雨上り
桜餅を購ふ舞妓片化粧（下唇にのみ紅を曳く化粧）

春惜む

田中 浅子

朧の夜おぼろ心で歩きをり

悠然と河馬の欠伸や春惜しみ

光風をくれなぬに染めフラミンゴ

竹林に雨音幽か利休の忌

蒲公英よみすずの詩の浮かびくる（星とたんぽぽ）

一陣の風に落花の川面かな

ふる里の訛り言葉や桜まじ

藤の昼

伊東 和子

大津絵の娘舞ひをり藤の昼

海老蔵の歌舞伎看板つばめ来る

川すぢの柳萌えをり阿国の碑

新緑の中に古塔の確と在り

文塚の土居つちみ一畳竹の秋

来た道は引返されず櫻若葉

きれぎれの主婦の時間や木の芽摘み

アマリリス

和田 郁子

つつじ垣燃ゆる山門くぐりけり

石像のガラシヤの気概紅躑躅

朱の塔を拝す五月の風享けて（浄瑠璃寺）

タイミング良ければ旨し古茶新茶

ゆうるりと三尾めぐりや風みどり

牡丹咲き古刹華やぐ季となりぬ

渾身の深紅を咲かせアマリリス

備前焼の里

井口 淳子

赤れんがの煙突の町うららなり

窯元の煙のなじむ春の雲

蝶の舞ふ長き築地や陶どころ

野趣に富む窯変の壺新樹光

春深き煙ひと筋幾星霜

名窯を守り継ぐ里や風光り

春日射す土管のオブジェ陶の里

若葉

石川かおり

葱坊主

大松 一枝

生垣の若葉湧き立つ銀閣寺

緑さす同仁斎の違ひ棚（銀閣寺東求堂）

木洩れ陽に光る水面や朱夏の風

透くる葉の蔭の濃淡立夏かな

若葉風セーラー服の紺の襟

せっかちをひと休みして新茶汲む

先導の蹄軽やか賀茂祭

竹の秋

伊藤 純子

旅鞆

笠井 清佑

公開の古墳の冥さ竹の秋

山藤の懸かれる古墳荘厳に

浮御堂千体仏のおぼろなる

里坊の庭は千坪屋蛙

屋上は光の渦や薔薇の園（屋上庭園）

桜鯛跳ねて大皿飛び出せる

摘み来たる土筆あれこれ夕の卓

郷愁の百万石の春田かな

産土に妣のぬくもり葱坊主

加賀の宿に寧らぐ抹茶花の昼

くつろげば窓一閃の初燕

添へられし女將の一句春の膳

篁の深きうねりや春疾風

また訪はむ故郷の春を惜しみけり

窓閉ざす洋風館の蔦若葉

夏立つやりネンのシャツに袖通す

志貴皇子を祀れる社縁さす

風薫り飛火野はいま萌黄色

薫風や阿の狛犬の口の中

旅鞆閉ざせしままの立夏かな

虫籠窓低き廂に菖蒲挿す

瑠璃集

リラ冷

中村ふく子

置薬のふうせん四角昭和の日
げんげ田の風とたはむれ昭和の子
白牡丹兄の遺影の笑まふかに
若葉風オープンカフエに足組みて
聞き流す内緒話よアマリリス

けんか神輿

大越 義雄

初節句

谷口 俊郎

背に眠る児に囁りの自在なり
ばら眺め薔薇の字画を思ひけり
暮れなづむ遠嶺近づく植田群
老鶯を聞きつぬかづく虚子の墓
緊張のけんか神輿に響動みけり

初孫を覗くカメラや初節句
菖蒲の湯ずしりと重き嬰を抱き
につこりと天使の笑みや菖蒲風呂
高い高いに得たるその笑み初幟
泣き止まぬ嬰を見守れり青しぐれ

アイス珈琲

大堀 賢二

夏帽子

渡部 法子

自慢気に差し出す大将初鯉
建築間近バトンリレーの燕組
花水木に薄紅以外もあると知る
母の日の特別コーナー三周す
切り替への会議一息アイス珈琲

自在なるトランプットや風薫り
千束の素麺流しハイキング
紫外線の予報早ばや夏帽子
供養とて筍飯のほのぼのと
青草に生れし鹿の仔歩みける

七月号月評

塩路 隆子

婚礼やマーガレットの花冠

常田 創

四月二十一日、残花の美しい季節に吉田希望さんとの華燭の典を挙げられた。式に参列をしたが心の籠ったいい結婚式であった。特に美しかったのは花嫁の小花のマーガレットの花冠が可愛いく印象的であった。お幸せを祈るばかりである。俳句は自分史。これからの新家庭での出来事、思いの俳句を楽しみにしている。

ボサノバが部屋に澱んで暮の春

西郷 慶子

作者は吟行、瓊の行事にも積極的にご参加をさせていただいている。従って上達のこつを掴まれるのも早い。一九五〇年代末にブラジルのリオデジャネイロに生れた。サンバのリズムにモダンジャズの要素を取り入れた。新しい形態のサンバであり、ボサノバとは「新しい傾向」の意味を持つ。何とはなくけだるい晩春、作者はボサノバを聴いている。ボサノバのリズムの醸し出す気怠さが部屋に澱む感じ、暮の春とボサノバの取り合わせの美味さ、句の素材として現代人でなければ作れない句として見逃せない一句にしががっている。「部屋に澱む」の措辞が抜群の選択である。

気兼ねなき土間の一角燕の巢

藤本 秀機

近江八幡のご出身であり、一泊吟行にはご熱心に参加していただいている。近江八幡辺りには、土間を開け放ち入館出来るような旧家が沢山残る町並みが残っている。この句からはそれが想像できる。何といっても「気兼ねなき」の上五が効いている。燕は記憶力がいいと聞いている。去年の燕がまたやって来て、旧家の土間の一角を借りて巣を作り、産卵、雛を育てるには安住の場所であろう。いい作品である。更に積極的に俳句に取り組んで戴きたい。楽しみにしている。

二歳児も汗かき走るドッグラン

土井久美子

作者は東京都世田谷区にお住まいで、紅玉集に投句をされている土井ほのかさん、このさんに二歳のとものちゃんの三人のママさん俳人である。お祖母さまは桂樟蹊子の弟子、筆者にとっては大先輩の瀬尾幸代さまであり、その素質を受け継がれたのかご熱心に参加して頂いている。子育ての最中、ご自分の俳句だけでも大変であるのに二人の子供さんの、子供らしい感性の俳句の指導もよくしていただいている。この句、犬を連れてのカフェ、とものちゃんの生き生きとした動きが句に現れて楽しい。いずれ三人の子供さんとの俳句を楽しみにしている。(以下略)